

建築文化賞

景観上優れた建築物

町民から愛される庁舎

大多喜町役場庁舎

建築主：大多喜町

設計：株式会社千葉学建築計画事務所

施工：大成建設株式会社千葉支店

所在地：夷隅郡大多喜町大多喜93番地



増築棟 内観 2階から東方向を見る

(撮影/西川 公朗)

大多喜町は戦国時代から続く城下町である。天正18年(1590)徳川四天王の一人、本多忠勝が大多喜城主となり、防御のための街道がカギ形に整備され、現在も江戸時代の町並みの面影を残している。明治、大正、昭和の時代になっても、夷隅郡の政治、経済の中心であった。そんな歴史のある大多喜町の庁舎が今回の作品である。

旧庁舎は早大教授で建築家、今井兼次の代表作の一つ、1959年度の日本建築学会賞を受賞した建物で、RC造、地下1階、地上1階建の建物である。庁舎が手狭になり、北側隣接地にS造地上2階建ての事務所棟を増築し、旧庁舎とブリッジでつなぐ配置となっている。

景観の観点から見て、増築棟は正方形の建物で事務室の天井は7メートル、一部が2階建ての建物である。外観は平面な建物であるが圧迫感はなく、外壁の鋼板溶融亜鉛メッキリン酸処理仕上げの色相が落ち着いた城下町の

雰囲気と溶け込んでいる。敷地は市街地より小高いところにあるが建物が低層のため、遠くから目立つことはない。

旧庁舎は12メートルスパンの門形フレームが東西に60メートルつづく単純な構造であるが、自然な高低差を活かした建物の配置は、庭の規模、室内からの景観に庁舎らしくない安らぎをあたえてくれる。また、ポーチの蛇行曲線はコンクリート打放しの外観に重厚感を感じさせない。50年以上使用した庁舎の改修に、使用されていたオリジナルの装飾金物や照明器具を再活用した設計者、町関係者の庁舎に対する想いに、建物の外観、内観からも景観上優れた建築物と言える。

(青柳 英俊)



既存棟バルコニーから増築棟を見る



増築棟 東側立面

(撮影/鈴木 研一)